

『東区 E 産探求プロジェクト事業 第 3 回まちあるき通船川コース』参加レポート

開志専門職大学 富田悠大

令和 7 年 11 月 1 日に開催された「東区 E 産探求プロジェクト事業 第 3 回まちあるき通船川コース」に、学生記者として参加しました！

これまでの第 1 回(北国街道コース)・第 2 回(臨港貨物線コース)に続く街歩きで、今回は「通船川」をテーマに、港や工場、排水機場などをめぐり、東区の産業と暮らしを支える“水と物流の歴史”を学びました。

私は港や川に関する知識がほとんどなかったので、「通船川ってどうやって今の町と関わっているのだろう？」という興味とともに当日を迎えました。冷たい雨が降る中でしたが、バスからの見学も交えながら貴重なお話を聞くことができました！

東区 E 産探求プロジェクト「通船川コース」とは？

今回のコースは、かつて木材運搬に使われた通船川沿いを中心に、港湾や工場の現場を見学しながら、産業の成り立ちを学ぶ企画です。「通船川」は、信濃川から日本海へとつながる重要な水路として、木材や資材輸送を担ってきた川でした。街歩きを通じて、川と産業、地域の暮らしの密接なつながりを実感できました。

No.1 臨港埠頭(リンコーCO より)

最初に訪れたのは「臨港埠頭」です。信濃川の終点に位置し、面積はおよそ 40 万平方 m (東京ドーム 8.5 個分・ビッグスワン 11 個分) もある広大な港です。ここは日本で唯一の“民間企業による私有港湾”であり、製紙原料・木材・鉄スクラップ・燃料など、私たちの生活に欠かせない資源を取り扱っています。

私有港湾とは、国や自治体ではなく、一つの企業が自社の管理や運営によって使用している港のことを指します。多くの港は国や地方自治体が所有・管理していますが、「臨港埠頭」のように企業が独自に維持・運営する港は全国的にも非常に珍しいそうです。

倉庫内には中国から輸入される融雪用の塩化カルシウムが大量に保管され、1 トンの袋で道路 7 キロメートルの融雪に使用されているそうです。さらに、ティッシュやハガキ、日常的に口にしていて食品の容器の材料もここから出荷されており、身近な生活と深く関わっていることを実感しました。

また、昔は港で丸太をいかだに組み、通船川を通して新潟合板振興株式会社へ運んでい

たそうです。一本 10 t もある丸太を水面に浮かべ、30～40 本をワイヤーでまとめて運ぶ姿を想像すると、当時の迫力や労働の工夫に感動しました。現在ではその作業は終了しましたが、長い歴史の中で臨港が東区の産業を支えてきたことがよく分かりました。

※なお、「臨港埠頭」では他社の貨物を多数預かっているため、セキュリティや情報保護の観点から港内の写真撮影は控えるよう案内されました。そのため今回のレポートには写真を掲載していませんが、実際に目にした倉庫のスケールや整然とした管理の様子は、想像していた以上に大きく、圧倒されました。

No.2 山の下閘門排水機場



(左：山の下閘門排水機場の看板の写真…① 右：山の下閘門排水機場の写真…②)

次に訪れたのが「山の下閘門排水機場」です。新潟駅からわずか 2.5km と市街地に近い場所にありながら、周囲は自然が豊かで、亀やサギ、タヌキなどさまざまな生き物が見られることに驚きました。

この排水機場は、昭和 39 年（1964 年）の新潟地震によって発生した大規模な浸水被害をきっかけに建設された施設です。当時、地盤沈下と津波により東区を中心に浸水が長期間続いたことから、水害対策の重要性が強く認識されました。その後、阿賀野川を水源とし、新潟市東区を流れる「通船川」の流域整備の一環として建設されたのが、この「山の下閘門排水機場」です。

排水機場の内部では、24 時間 365 日体制で職員が常駐し、東区を水害から守るため日夜監視と運転管理が行われています。最大で毎秒 51.6 トン、25 メートルプールをわずか 8 秒で空にできるほどの排水能力があり、今もなお新潟の暮らしを支える重要な存在です。実際に現場を訪れて、通船川とともに“水と生きる町”新潟を根本から支えていることを強く実感しました。

No.3 新潟合板振興株式会社



(左上:新潟合板振興株式会社で作られた合板の写真…③ 右上:リングバーガーラインの写真…④)

(左下:切り出した板を乾燥させるドライヤーの写真…⑤ 右下:熱圧着を施す機械の写真…⑥)

最後に訪れたのは「新潟合板振興株式会社」です。ここでは主に新潟県産の杉を使い、地産地消の取り組みを行いながら合板を製造しています。

薄い板を製品によって3枚、5枚、7枚と組み合わせ、変えて熱圧をかけて接着し、4mm～30mmの厚さの合板を作る工程を見学しました。130度ほどの熱を加えて圧着するそうで、工場内は迫力満点でした。原木の皮を剥く「リングバーガーライン」や、板を乾燥させるドライヤーなど、木材が製品になるまでの過程が細かく分かりました。

驚いたのは、丸太の約半分が合板として商品化され、残りが工場内のボイラー燃料に再利用されている点です。資源を無駄にせず活かし切る仕組みが印象的でした。

まとめ

今回の通船川コースでは、“水と産業”という視点から東区の魅力を学ぶことができました。港や工場、排水施設など、普段の生活では見えない場所の裏側に地域の人々の努力があることを実感しました。特に、臨港埠頭で聞いた「丸太を川に浮かべて運ぶ」という昔の知恵と、新潟合板振興株式会社で見た“資源を無駄なく活かす現代の工夫”が印象的でした。

通船川は、かつて阿賀野川と信濃川を結び、木材や資材を運ぶ“産業の大動脈”として新潟の発展を支えてきました。しかし現在では、洪水の防止や水質の維持を担う“防災の川”としての役割へと姿を変えています。輸送の川から生活を守る川へとその使命を変えながらも、通船川は今なお東区の暮らしを支える大切な存在です。

歴史と環境、そして人の力が調和する東区の産業文化を、これからも深く学んでいきたいと感じました。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！